

有田・小田部 54

—有田遺跡群第246次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1215集

2014

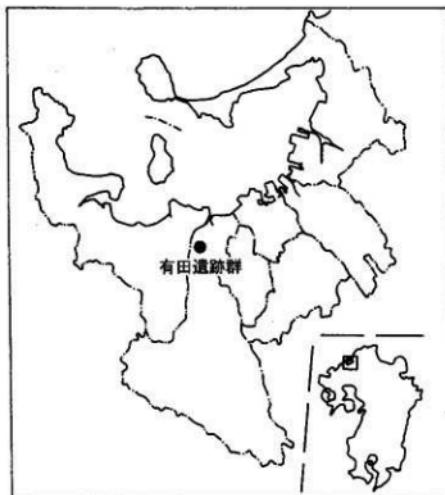
福岡市教育委員会

ARI TA KO TA BE

有田・小田部 54

—有田遺跡群第246次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1215集



遺跡略号 ART-246
調査番号 1230

2014

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの責務であります。また、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であります。そのため、本市教育委員会では事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、福岡県立福岡講倫館高等学校の部室増築工事に伴い調査を実施した有田遺跡群第246次調査の成果を報告するもので、今回の調査では、主に弥生時代の甕棺墓地を確認することができました。これらは、当時の有田地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、福岡県教育庁や福岡講倫館高等学校をはじめとする数多くの関係者のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

例　言

- 本書は、福岡市教育委員会が福岡県立福岡講倫館高等学校の部室増築工事に伴い、福岡市早良区有田3丁目9番1号において発掘調査を実施した有田遺跡群第246次調査の報告書である。
- 発掘調査および整理・報告書作成は、福岡県の受託事業として実施した。
- 報告する調査の基本情報は、下表のことおりである。
- 本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣・清金良太・辻節子が行った。
- 本書に掲載した遺物実測図の作成は、榎本・米倉法子が行った。
- 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、榎本が行った。
- 本書に掲載した挿図の製図は、榎本・米倉が行った。
- 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系(第II座標系)によるものである。
- 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 40'$ 西偏する。
- 遺構の呼称は、壇棺墓をST、木塙墓をSR、貯蔵穴をSU、土坑をSKと略号化した。
- 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 本書に掲わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆および編集は、榎本が行った。

遺跡名	有田遺跡群	調査次數	第246次	遺跡略号	ART-246
調査番号	1230	分布地図図幅名	原82	遺跡登録番号	020309
申請面積	50.0 m ²	調査対象面積	50.0 m ²	調査面積	93.2 m ²
調査地	福岡市早良区有田3丁目9番1号			事前調査番号	24-1-77
調査期間	平成24(2012)年12月18日～平成25(2013)年1月18日				

本文目次

I.はじめ	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	6
1. 概要	6
2. 遺構と遺物	6
1) 烧柏墓(ST)	6
2) 木墳墓(SR)	12
3) 坟藏穴(SU)	14
4) 土坑(SK)	15
5) その他の遺物	15
3. 結語	16

挿図目次

第1図 有田遺跡群位置図(1/50,000)	3
第2図 有田遺跡群調査区位置図(1/7,500)	4
第3図 調査区位置図(1)(1/1,000)	5
第4図 調査区位置図(2)(1/400)	5
第5図 調査区全体図(1/100)	7
第6図 ST001・002実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10)	9
第7図 ST003・004実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10)	10
第8図 ST005・006・007実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10)	11
第9図 SR008、SU011・012・013、SK014実測図(1/30、1/40)	13
第10図 SU012・013、攪乱出土遺物実測図(1/3、1/4)	14

図 版 目 次

- 図 版1 調査区全景(東から)
- 図 版2
 - (1)ST001(東から)
 - (2)ST002(西から)
 - (3)ST003(東から)
- 図 版3
 - (1)ST004(西から)
 - (2)ST005(東から)
 - (3)ST006(南から)
- 図 版4
 - (1)ST007(東から)
 - (2)SR008(西から)
 - (3)SR008土層(南から)
- 図 版5
 - (1)SU011(南から)
 - (2)SU012(北から)
 - (3)SU012土層(東から)
- 図 版6
 - (1)SU013(東から)
 - (2)SU013土層(東から)
 - (3)SK014(北西から)
- 図 版7 出土遺物(1)
- 図 版8 出土遺物(2)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成24(2012)年8月22日付、24教施第314号-4にて福岡県教育庁教育企画部施設課長より福岡市教育委員会教育長宛てに福岡市早良区有田3丁目に所在する福岡県立福岡講倫館高等学校部室増築工事(工事面積: 50m²、構造: RC造2階建)にかかる事前審査についての依頼がなされた(事前審査番号: 24-1-77)。

これを受け福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課で書類審査を行ったところ、事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群に含まれることから、遺跡の有無を確認するために事前の試掘調査が必要であることを平成24年8月27日付、経埋審第1-77号にて回答した。後日、条件の整った同年11月27日に試掘調査を実施し、表土直下の鳥柄ローム層上面で甕棺墓数基を確認した。今回の工事にあたっては、事前に全面の地盤改良を伴うことから埋蔵文化財への影響が回避できないため、同月29日付、経埋審第1-77号にて工事施工に先立ち発掘調査が必要であることを加えて回答した。

その後、両者で協議を進め、同年12月14日付で福岡県知事を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財調査委託契約を締結し、同月18日より発掘調査を、翌平成25年度に整理・報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託: 福岡県

調査主体: 福岡市教育委員会

(発掘調査: 平成24年度、整理・報告書作成: 平成25年度)

調査総括: 経済観光文化局 文化財部 埋蔵文化財調査課 課長	宮井善朗
調査第2係長	菅波正人(24年度)
	榎本義嗣(25年度)
調査庶務: 同部 埋蔵文化財審査課	米倉秀紀
課長	米倉秀紀
管理係長	和田安之
管理係	古賀とも子(24年度)
	川村啓子(25年度)
事前審査: 埋蔵文化財審査課	米倉秀紀
課長	米倉秀紀
事前審査係長	加藤良彦
主任文化財主事	佐藤一郎
事前審査係	今井隆博(24年度)
	松尾奈緒子(25年度)
調査担当: 埋蔵文化財調査課	主任文化財主事 榎本義嗣
	文化財主事 清金良太
調査作業: 梅野眞澄 木田憲作 木田ひろ子 国友和夫 柴田勝子 柴田春代 達節子	
時吉ひとみ 深溝嘉江 松本順子 三谷朗子	
整理作業: 大澤悦子 木本恵利子 錦田慧 松尾真澄	

II. 遺跡の立地と環境

玄界灘に北面し、背後に背振・三郡山系をひかる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、東側から粕屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。今回報告する有田遺跡群は、このうち早良平野に位置する。

同平野の西側には背振山系から北側に派生する飯盛・長垂山塊が延びて、今宿平野と画される。また、東側を油山から北側に発達する丘陵が連なり、福岡平野との境界をなす。平野中央部を博多湾へと北流する室見川や金屑川、名柄川、十郎川などの中小河川による沖積作用によって平野の大半が形成されているが、下流域には第三紀丘陵や洪積台地が点在し、沿岸部には帯状の海岸砂丘が発達する。また、油山北西山麓から北側に飯倉丘陵と呼ばれる高位および中位の段丘が舌状に延びる。

本遺跡は、平野中央北側の室見川と金屑川に挟まれたAso-4火碎流堆積による下層の八女粘土および上層の鳥栖ロームを主な堆積物とする洪積世独立中位段丘上に展開する。この段丘は、南北約1.7km、東西約0.7kmに拡がり、遺跡中央南側の最高所で標高約15mを測る。東西を両河川に浸食されるため、小段丘崖が形成され、また、北側を主体に浅く長い谷が複数開析するため、八手状に舌状の支丘が発達する複雑な地形を呈する。

本遺跡の本格的な発掘調査は、区画整理事業に伴う1967年の九州大学考古学研究室による第1次調査を端緒とし、1975年以降は本市教育委員会による緊急調査を主体にこれまでに250次を超える調査が行われてきた。以下、時代別に既往の調査から得られた知見を概略する。

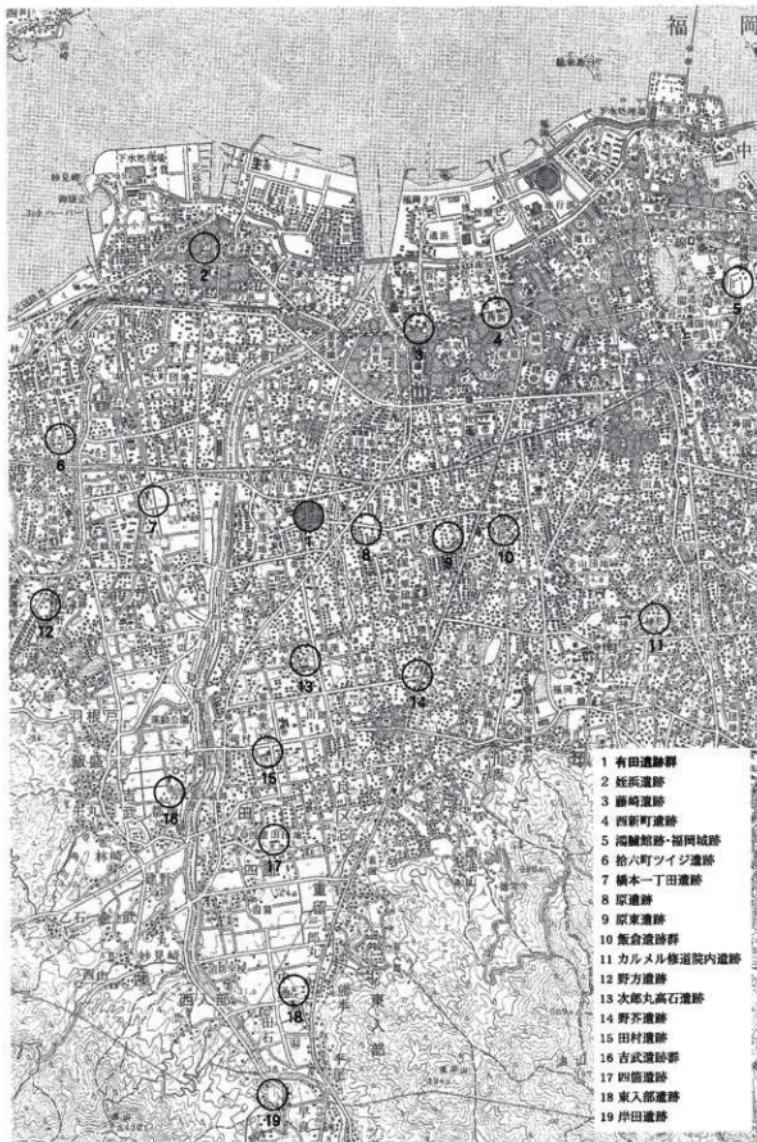
旧石器時代では遺構の検出はないものの、該期のナイフ形石器やポイント等の遺物が稀に包含される。特に中世後半期の造成により包含層の遺存状況は良好ではない。

縄文時代では台地の南西部において、環状に配される中期から後期の立柱痕跡を有する貯蔵穴群が検出されており、注目される。

続く弥生時代では、早期の突堤式單純期において段丘南西部に接する沖積地で該期の土器や大陸系磨製石器が出土しており、初期水稻農耕を考察する上で貴重な成果があがっている。また、前期以降は早良平野を代表する拠点集落に発展し、前期初頭には台地の高所を楕円形状に囲むように断面「V」字形の環濠が長径約300m、短径約200mの規模で巡る。その後、後続して別地点にも環濠が認められ、各所に集落が展開するが、後期前半以降は終末期まで断絶する。また、斐棺墓地を主体とする墓地は、数箇所に分散して造営されるが、長期における墓域は限定される。現在のところ、2群の墓地において青銅利器や前漢鏡等の副葬が確認されており、有力者層の存在が窺える。このうち、今回の調査区に近接する地点では、戦後の1949年1月に森貞次郎氏を中心に9基の斐棺墓の調査が実施され、うち2号斐棺から細形銅戈1口が出土している。また、青銅器製作を裏付ける鋳型も散見し、生産活動においても平野内での卓越性が認められる。

古墳時代においては、弥生時代終末期から続く集落が形成され始め、中期段階では韓半島系の軟質や陶質土器が多く出土する。後期から古代にかけては、壙列や溝に区画された大型の倉庫群や建物群が台地高所付近に造営され、「那津官家」や早良郡衙にかかる施設であることが指摘されている。また、詳細は不明ながら台地の北東部には大型円墳が存在したことが近世の地誌に掲載されている。なお、律令期では本遺跡周辺は、早良郡に存在した7郷のうち田部郷に含まれる。

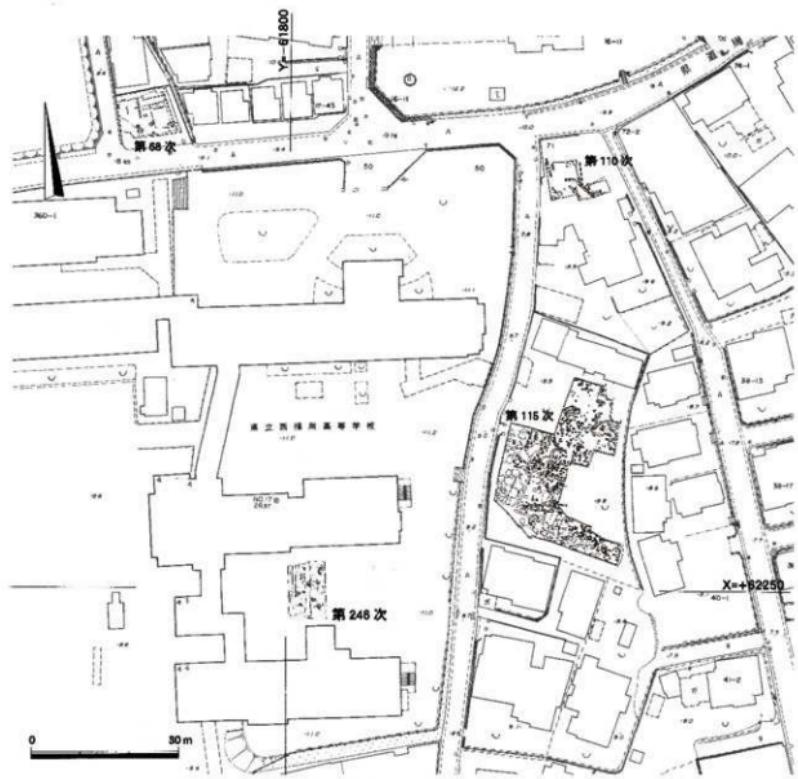
中世では特に後半段階の戦国期の遺構が顕著で、堀で方形区画された遺構群が数箇所で確認されており、大内氏の支配下で早良郡に設けられた郡代や在地の有力土豪の城館の可能性が指摘されている。また、今回の調査区周辺は大友氏の家臣である小田部氏の里城の推定地ともなっている。



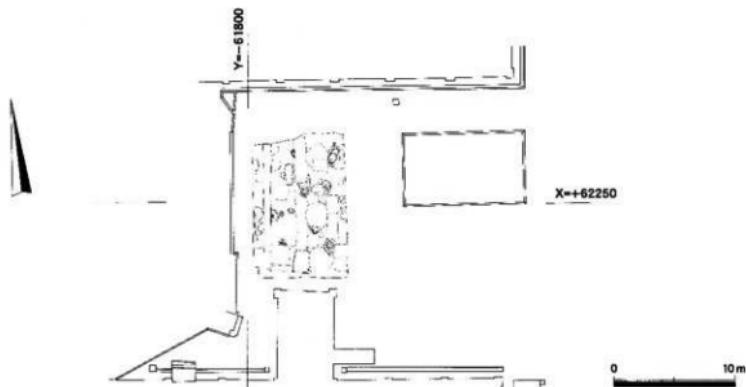
第1図 有田遺跡群位置図(1/50,000)



第2図 有田遺跡群調査区位置図(1/7,500)



第3図 調査区位置図(1)(1/1,000)



第4図 調査区位置図(2)(1/400)

III. 調査の記録

1. 概要

今回報告する有田遺跡群第246次調査区は、早良区有田3丁目9番1号の福岡県立福岡講倫館高等学校内に所在し、調査前の現況は標高約11.1mを測るコンクリート叩き面であった。調査地点は、遺跡の南端部に位置し、先述のとおり同校内では戦後に喪棺墓地の調査が実施され、細形銅戈が出土している。また、周辺の調査例は比較的少なく、第3図の範囲内では第68・110・115次の各調査が行われ、北側の第68・110次調査では中世後半から近世を主体とする遺構が、東側斜面上の第115次調査では古代から中世前半期の製鉄関連を含む遺構が検出されている。

本調査区は、台地の最高所から南側に向かって舌状に延びる丘陵端部付近に位置し、調査区周辺での丘陵の東西幅は100mに満たない。前述の第115次調査区の東側では斜面が確認され、上層には包含層が堆積する。調査区はコンクリート叩きおよびその下層のパラス直下に鳥栖ローム層の遺構面がある。その標高は約10.8mを測り、調査区内で殆ど高低差がないことや、後述の遺構の遺存状況から、周辺は大きな削平を受けていることが予測される。また、調査区の西側数mでは比高差2m以上の切り下げ造成が行われ、校舎等が設けられていることから、本調査区は西側斜面に近い丘陵端部の尾根線付近に占地するものと推定される。なお、このローム層の上層約0.2mはやや特異なシルト質の暗黄褐色土でその下位に通有の赤橙色弱粘性土が認められ、調査区西側の遺構では遺構面から約0.4mで八女粘土層が確認できた。

遺構検出は、遺構面上面までを重機で剥ぎ取って実施した。調査区内は削平や過去の建物等による搅乱が著しく、遺構の多くが破壊を受けるが、弥生時代の前期末から中期前半の喪棺墓7基と土塙墓もしくは木棺墓1基からなる墓地、前期後半の貯蔵穴3基、土坑1基等を確認できた。また、搅乱にも喪棺片が多数混じっていた。出土遺物はコンテナケースにして17箱が出土し、大半が喪棺である。

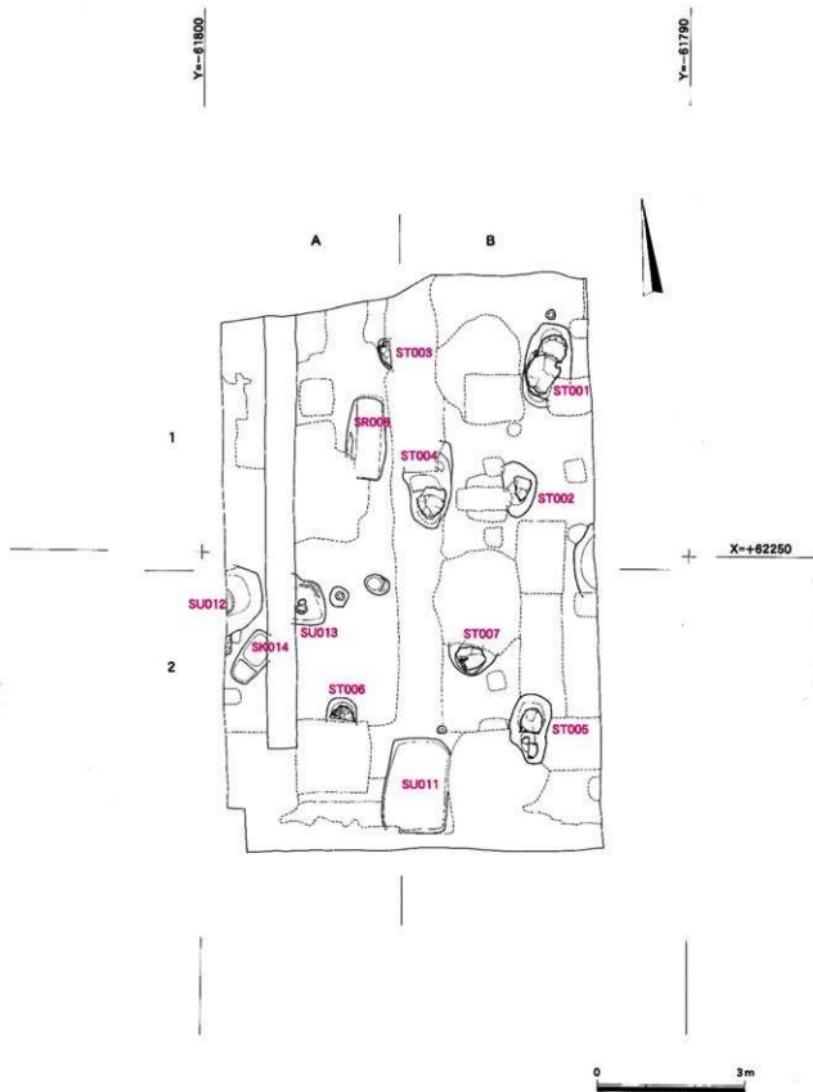
発掘調査は平成24(2012)年12月18日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りから開始し、併行して発掘器材の搬入や基準点測量を実施した。翌日から遺構検出や搅乱の除去を行い、順次検出遺構の掘り下げや写真撮影、図化、周辺測量等の作業を進め、喪棺墓の掘削作業がほぼ終了した翌年1月8日に高所作業車による全体写真の撮影を行った。その後、喪棺等の遺物の取り上げや残る図化作業、個別遺構写真撮影、片付け、重機による埋め戻し等を終え、1月18日に器材を撤収して第246次調査を完了した。なお、この間に学校の授業の一環で、2・3年生の生徒を対象とした発掘現場説明会を行った。

調査対象面積は、「I.-1.調査に至る経緯」とおり、部室増築部分50.0m²であったが、周囲の配管等の工事により喪棺墓が破壊を受けることからその範囲も調査範囲に加えたため、実際の調査面積は93.2m²であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。

2. 遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における平面座標を基準とした英字(西をA、東をB)と数字(北を1、南を2)の組み合わせによるグリッド表記を用いる(第7図参照)。

1) 喪棺墓(ST)



第5図 調査区全体図(1/100)

攪乱や削平により遺存状況は良好でないものの、弥生時代前期末から中期前半の計7基の甕棺墓を確認することができた。尾根線の派生する南北方向に主軸を有し、現況での切り合はない。後世の破壊により合口か单棺かの判別ができることが多い。なお、いずれの甕棺墓にも副葬遺物はなく、人骨も遺存していない。

ST001(第6図) 調査区北東のB-1に位置する挿入式の成人用甕棺墓である。上下共に甕を用い、僅かに上甕が下甕に挿入される。現況での墓壙は不整な隅丸方形を呈し、長さ1.5m、幅1mが遺存する。墓壙竪坑および上下棺の上半が削平され、墓壙の南東部も攪乱により破壊されるが、斜坑の下半部は残る。主軸方位はN-24°-E、埋置角度は推定で31°を測る。前期末の甕棺墓である。

出土遺物(第6図1・2) 1は上甕に使用された甕で、底部を欠損する。復元口径61.6cm、残存器高68.1cmを測る。緩く外反する口縁部上端に粘土を貼付し、内側に突出させる。また、口唇部の上下および内面にはヘラ状工具による刻目を施す。頭部および胴部上半には横位の3条の沈線が巡り、下位の沈線は螺旋状に描かれるため、一部4条となる。また、その沈線間には3条もしくは2条単位の縦位の沈線を施す。なお、下位には両者の切り合いが認められ、横位の沈線が先行する。調整は内外面にナデ調整を行うが、胴部外面の中位の一部に刷毛目が残る。色調は橙色を呈し、胴部上半には黒斑が認められる。

2は下甕に用いられた復元口径77.2cm、器高82.0cmを測る甕である。底部は検出時には遺存していたが、脆弱であったため、取り上げ時に細片化してしまったことから復元的に図化した。1同様の口縁部形態を呈するが、外面の口唇部の中央はヨコナデによる凹面が深く、その上下に板状工具による刻目を同時に施す。頭部および胴部最大径付近に横位の3条のシャープな沈線が巡る。調整は口縁部にヨコナデを施す他は、外面に丁寧なナデを加える。色調は外面が暗赤褐色、内面は明赤褐色で、器面の1/4程度に黒斑がある。

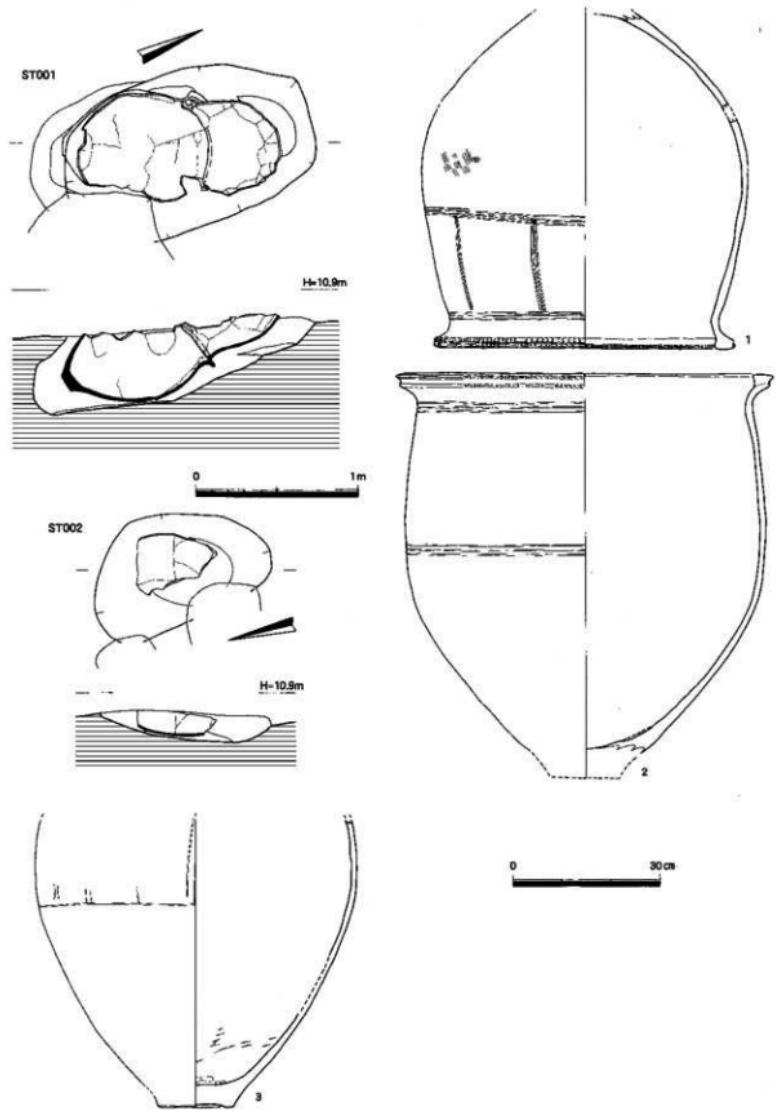
ST002(第6図) B-1で検出した甕棺墓であるが、上部を大きく削平され、西側も攪乱されるため、遺存状況は不良である。单棺もしくは下甕と推測される甕の胴部下半のみが原位置を保つ。墓壙の底面が南側に傾斜することから、斜坑の一端である可能性が高い。図の断面線を主軸と仮定すると、その方位はN-14°-Eを測る。前期末から中期初頭の甕棺墓であろう。

出土遺物(第6図3) 墓壙内に遺存する甕棺と西側攪乱や試掘時等の出土甕棺片を接合したもので、底部から胴部中位までを復元することができた。底径15.6cm、残存器高59.0cmを測る。外面の胴部最大径のやや下位に断続的に施された横方向の浅い沈線が1条巡る。また、その沈線から頭部に向かって2条単位の縦位の沈線が認められるが、極めて浅く不鮮明である。調整は外面が丁寧なナデ、内面もナデ調整を行うが、底部近くには板状工具によると思われる木口の痕跡が残る。刷毛目工具であろう。また、底部には指オサエを施す。色調は外面が赤橙色、内面が黄橙色を呈する。なお、後述の21が口縁部である可能性を有する。

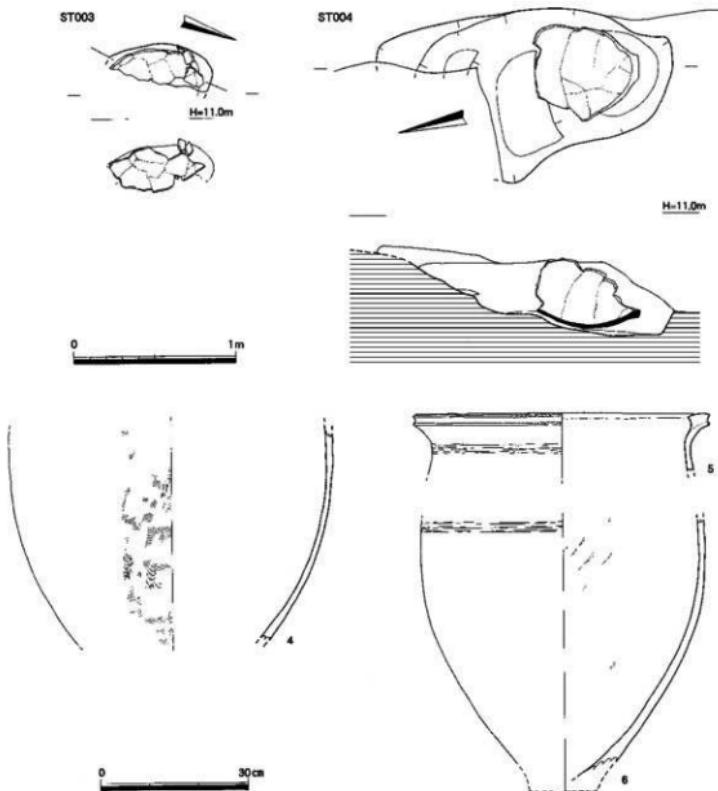
ST003(第7図) 調査区の北側のA-1で確認した。上部は削平され、北側および東半部が攪乱によって破壊されるためST002同様に遺存状況が悪く、底部を南側とする甕の胴部が残るのみである。墓壙は甕に沿って半楕円形状に遺存する。図の断面線を主軸と想定すると、その方位はN-18°-Wである。周辺の甕棺墓から前期末から中期前半の所産であろう。

出土遺物(第7図4) 甕の約1/4から復元して図化した。図の上位が胴部最大径と推定され、66.4cmを測る。外面には綫方向の刷毛目調整を残し、内面はナデを施す。色調は赤橙色を呈し、上半に黒斑が認められる。

ST004(第7図) B-1に位置する。現況で单棺の成人用甕棺墓であるが、西側の攪乱によって棺体お



第6図 ST001・002実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10)

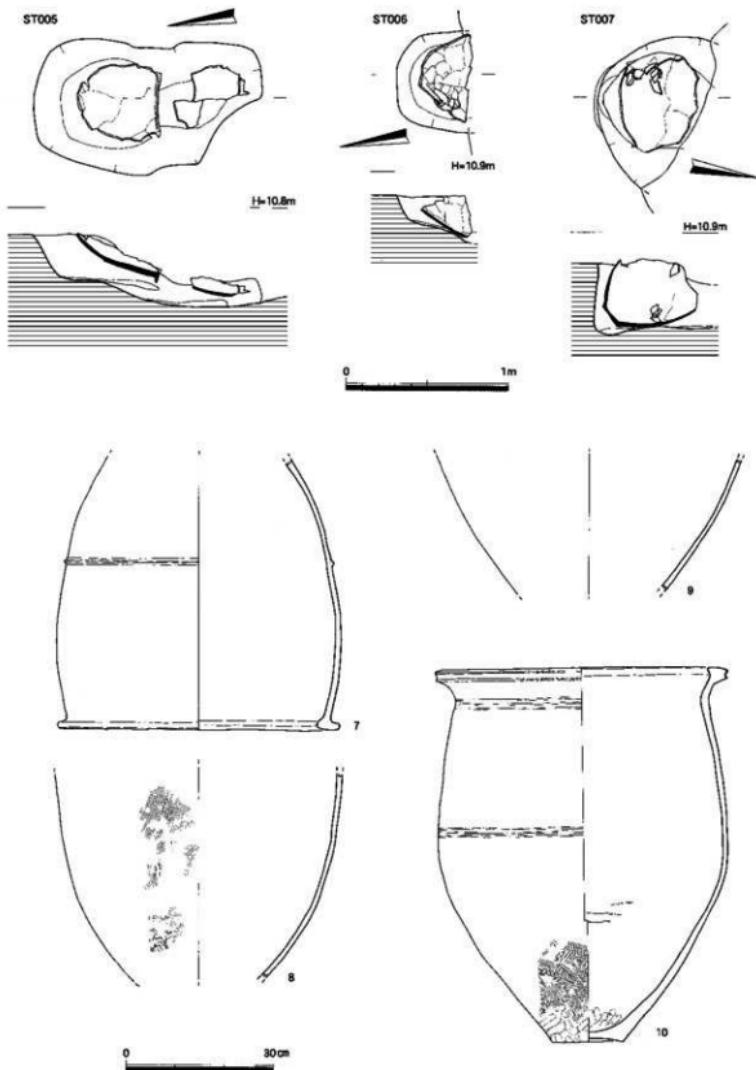


第7図 ST003・004 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10)

より墓壙の大半が破壊されており、合口であった可能性もある。原位置を保って出土したものは、喪の下半部である。墓壙の南側は斜坑の一部と思われ、底面は北側に向かって緩やかに高くなり、途中に数段の平坦面を有する。主軸方位はN-13°-E、埋置角度は推定で20°を測る。前期末の喪棺墓に位置付けられよう。

出土遺物(第7図5・6) 5は棺内の埋土から出土した喪棺の口縁部で、6の口縁部片と思われるが、両者に直接の接合面はない。緩く外反する口縁部上端に粘土を貼付し、内側に突出させる。また、上面は内側に傾斜する。口唇部にはヘラ状工具による刻目が施され、頭部には横位の3条の沈線が巡る。口縁部はヨコナデ、頭部は丁寧なナデ調整を行う。復元口径は61.0cmを測る。

6は遺構の項で述べた上半部を欠損する喪で、器高約55cmが遺存する。底部の一部が検出時には遺



第8図 ST005・006・007 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10)

存していたが、脆弱であったため、取り上げ時に細片化してしまったことから復元的に図化した。上位の胸郭最大径付近にややシャープな3条の沈線を有し、その位置での復元径は57.8cmである。調整は内外面共に丁寧なナデを施すが、内面には板状工具によると思われる木口の痕跡が斜方向に残る。色調は黄橙色を呈する。

ST005(第8図) 調査区の南東部のB-2で検出した成人用の合口壺棺墓であるが、周辺の搅乱や削平により、棺体や墓壙の多くが失われる。上下共に甕を用いるが、南側の下甕は大きく破壊されて上半を欠損するため、合口の形式は不明である。現況での墓壙は隅丸方形状で、底面には低い段を有し、南側が低い。なお、棺体は地山直上ではなく、ブロック混じりの埋土の上で検出したことから、整地を施した上で埋置を行ったものと推測される。主軸の方位はN-10°-Eで、埋置角度は推定で20°を測る。中期初頭から中期前半頃の壺棺墓である。

出土遺物(第8図7・8) 7は上甕に用いられた胸郭下位を欠損する甕で、復元口径57.6cm、残存器高55.8cmを測る。口縁部は逆「L」字状を呈するが、内側にも鈍い面をもって張り出す。胸郭へは口縁下から直接移行し、胸郭最大径より下位に断面三角形の低い突帯を貼付する。調整は口縁部および突帯部を除き、丁寧なナデを施す。色調は橙色を呈する。

8は下甕に使用された甕で、上述のとおり個体の遺存状況は不良である。外面は器面が一部剥落するが、縱方向を主体とする刷毛目が残り、内面はナデ調整で仕上げる。色調は内外面共に黄橙色である。なお、後述の25が底部である可能性を有する。

ST006(第8図) A-2で確認したが、上部の削平や南側の搅乱によって一部の遺存にとどまる。半円状に残る墓壙内に底部を北側方向として埋置する甕の胸郭下半が残存する。墓壙の底面は南側に傾斜しており、他の壺棺墓の検出状況から上甕の一部である可能性が高い。なお、甕の中央やや東側には、細片化によりやや不明瞭ながら径5cm程度の大きさで欠損する部分が認められ、焼成後の穿孔と考えられる。図の断面線を主軸であると推定すると、その方位はN-9°-Eである。周辺の壺棺墓から前期末から中期前半の所産であろう。

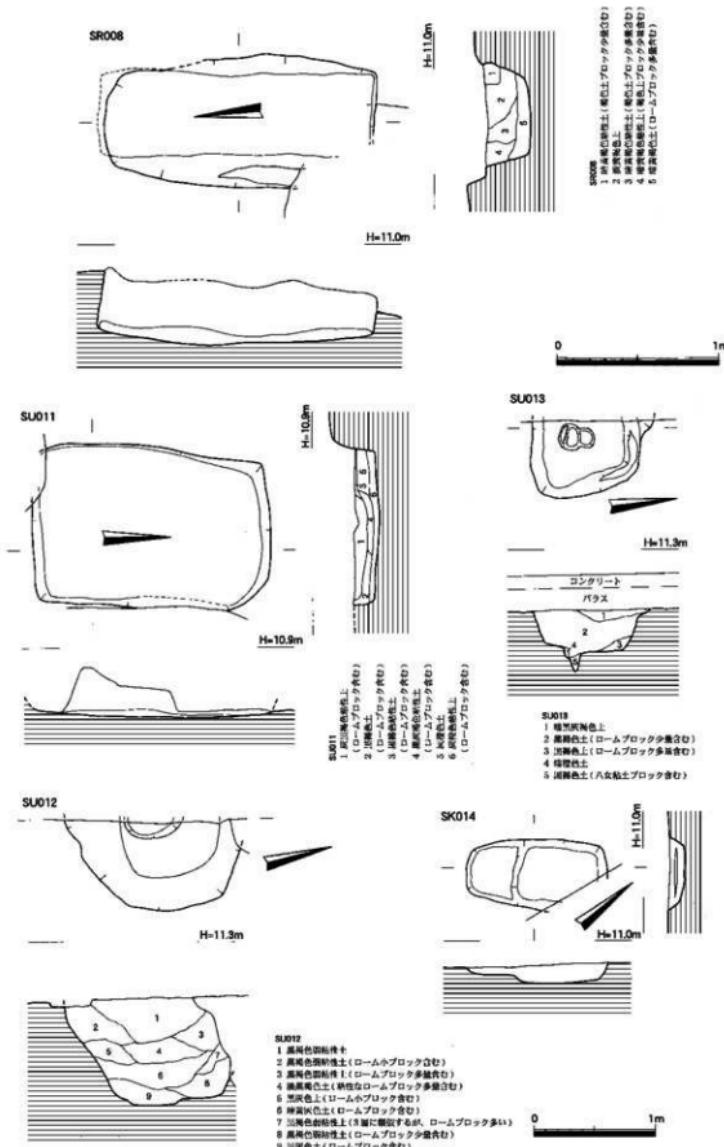
出土遺物(第8図9) 遺存する甕を復元図化したもので、胸郭下半は直線的にすばむ。内外面共にナデ調整を施すが、外面は丁寧で平滑に仕上げる。色調は外面が黄橙色で黒斑が認められ、内面が橙色である。

ST007(第8図) B-2に位置する壺棺墓で、北側の搅乱によって墓壙や棺体の多くが失われる。原位置を保つものは甕の下半部で、単棺もしくは下甕と推測される。半円形に遺存する墓壙は、斜坑の一部と思われ、端部はやや深く掘り込まれる。主軸方位はN-9°-W、埋置角度は推定で35°を測る。前期末の壺棺墓である。

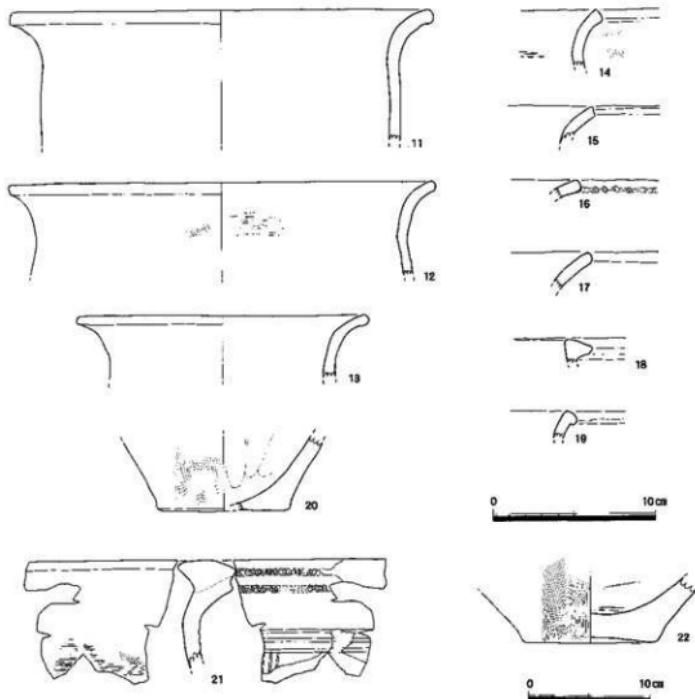
出土遺物(第8図10) 上述の甕下半部と北側の搅乱遺物を接合したところ、口縁部までを復元することができた。その結果、復元口径59.9cm、器高76.2cmの甕であることが判明した。外反する口縁部の上端に粘土を貼付して肥厚させ、内側に突出させる。口唇部の中央はヨコナデし、その上下に板状工具によると思われる小振りな刻目を施す。頸部および胸郭最大径の僅かに上位に横位の3条の沈線が巡るが、縱方向の沈線は認められない。底部は僅かに上げ底状を呈する。調整は口縁部内外面をヨコナデ、胸郭外面は平滑なナデ調整で仕上げるが、底部付近には刷毛目や指オサエを残す。また、内面は横方向にナデを施し、下半にはその際の工具の痕跡が認められる。なお、底部付近はやや粗いナデや指で調整する。色調はくすんだ黄橙色を呈する。

2) 木壙墓(SR)

壺棺墓と主軸の類似する土壙墓もしくは木棺墓1基を検出した。



第9図 SR008、SU011・012・013、SK014 実測図 (008は1/30、他は1/40)



第10図 SU012-013、搅乱出土遺物実測図(21・22は1/4、他は1/3)

SR008(第9図) ST004の北西、A-1で検出した土壙墓もしくは木棺墓で、南西側コーナーを搅乱によって切られる。平面プランは端正な長方形で、長さ1.7m、幅0.8m、深さ0.4m、主軸方位N-6°-Eを測る。壁面の立ち上がりは急で、両小口部はほぼ直立し、西側側面の上位には狭いテラスを有する。底面は両小口部がやや反る形状を呈する。断面の土層観察では、下層にブロックを多量に含む水平堆積層(5層)が認められ、底面の整地土と考えられる。その上層の不整合な1~4層は、木棺の腐食土や崩落土もしくは埋め戻し土と推測され、木棺墓であった可能性が高い。出土遺物は、細片の弥生土器3点と黒曜石剥片1点のみである。

3) 貯蔵穴(SU)

調査区の南西側で貯蔵穴と考えられる3基の遺構を確認した。

SU011(第9図) 調査区の南端中央に位置する方形の貯蔵穴であるが、搅乱中で検出したため、遺存状況は良くない。長さ1.95m、幅1.3mを測り、深さは最深で0.4mであるが、大半の壁面は0.1m前後しか残っていない。覆土にはブロックが顕著に含まれ、大半は埋め戻し土であろう。遺物は全く出土していない。

SU012(第9図) 調査区西端のA-2で確認したが、遺構の西半部は調査区外に位置し、北側の壁面の一部は擾乱によって破壊される。現況で円形もしくは隅丸方形形状の平面プランをなすものと推定され、径約1.5mを測る。断面は逆台形状を呈し、底面には浅い窪みが認められた。覆土は1層を除き、地山ブロックが多く含まれており、人為的な埋め土であろう。

出土遺物(第10図11～19) 11・13は下層、他は上層の覆土から出土した弥生土器である。これらの内13・17は壺で、13は頸部から大きく開く口縁部が付き、端部には鈍い面を有する。器面が荒れており調整は不明である。17は細片で器面が風化するが、内外面の一部に赤色顔料が残る。他の11・12、14～16、18・19は甕の口縁部で、18を除き如意形を呈する。如意形のものは、19を除き口唇部に面取りを行い、16のみ下端にへラ状工具による浅い刻目を施す。器面は風化するものは多いが、一部に刷毛目調整が残り、口縁部はヨコナデを施す。12は11に比して胴部が張る。色調は黄橙色を主体とし、胎土には砂粒が目立つ。また、19は端部を丸く收め、下端部が段状をなす。褐色の色調である。18は口縁部に断面三角形の粘土を貼付するもので、端部に刻目はない。暗赤褐色の色調を呈する。以上の出土遺物から弥生時代前期後半から末の遺構と考えられる。

SU013(第9図) SU012の東約1mで検出した。西側には避難用の救助袋を固定するためのフックがコンクリート叩き面に設置されているため、遺構の西半部は未掘であるが、現況から平面プランは幅約1mの隅丸方形形状を呈するものと考えられる。断面は逆台形を呈し、壁面の立ち上がりは急である。北東コーナーの壁面には狭い平坦面を有する。底面はほぼ平坦であるが、ビット状の掘り込みが2基認められ、深さは北側が0.1m、南側が0.2mを測る。

出土遺物(第10図20) 弥生土器甕の底部で、外面は縦方向の刷毛目、内面は指オサエで調整を施す。他にも弥生土器が出土しているが、いずれも細片である。

4) 土坑(SK)

以下の1基の土坑は、検出当初その形状から土塙墓もしくは木棺墓と考えたものであるが、他の埋葬遺構と主軸が異なることや底面の段差から土坑として報告する。

SK014(第9図) 調査区南西のA-2に位置する隅丸長方形プランの土坑で、長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.15mを測る。SU013同様の理由で北東部が未掘である。底面の南西部には平坦面を有する。なお、覆土から出土遺物はなかった。

5) その他の遺物(第10図21・22)

最後に搅乱から出土した甕棺片2点の報告を行う。21はST002の項で触れた口縁部で、ST002の西侧を切る搅乱から出土した。出土位置や色調、胎土から3の甕棺と同一個体の可能性があるが、直接の接合面がない。外反する口縁部の上端に粘土を貼り付け、内側に突出させる。口唇部の中央はヨコナデにより凹面をなし、その上下にへラ状工具による刻目を施す。頸部には横方向の3条の沈線を有し、その下端から3条の縦方向の沈線を加える。なお、これらの沈線は3とやや異なり、幅広で深い。口縁部の内外面はヨコナデ調整を行うが、頸部内面には横方向の刷毛目が認められる。色調は赤褐色を呈する。22はST005で述べた底部で、ST005の南側を切る搅乱から出土した。出土位置等からST005の下甕である8と同一個体の可能性が高いが、21同様に直接接合しない。僅かに上げ底で、外面には縦方向の刷毛目調整を行う。内面はナデを施すが、板状工具による調整痕と思われる木口の跡が多く残っている。色調は内外面共に赤橙色を呈する。

3. 結語

最後に本調査で確認した遺構の時期やあり方を周辺調査成果も含めて検討しておきたい。

今回検出した遺構は、全般に削平や搅乱により遺存状況は良好ではないが、その時期は弥生時代の前期後半から中期前半と考えられ、遺物が全く出土していない2遺構(SU011、SK014)も周辺遺構の時期が限定されることや覆土の色調の類似性から該期に収まるものと考えられる。また、遺構の性格は貯蔵穴3基(SU011・012・013)および土坑1基(SK014)の集落的な要素のものと、甕棺墓7基(ST001～008)および木棺墓1基(SR008)の埋葬関連の遺構に分かれる。

前者は調査区の南西側に分布する。貯蔵穴は全容が不明なものが多いため、平面プランは方形状を呈する。この中で遺物が最も多く出土したSU012では甕が多く見られ、の中でも如意形口縁が大半を占めることや、刻目を有するものは1点(16)のみであったが、その位置が口唇部下端であることから前期後半に位置付けられる。また、SU013の底部片も厚底化が進んでおり、該期に相当する可能性が高い。

また、後者の埋葬遺構は、前者とやや排他的な分布を示し、調査区の中央から東側に主軸方位を南北方向にとり、合口であることが判明する甕棺墓では、全て北側から南側に下甕を挿入している。また、検出した基数が少ないため、墓地全体のあり方は不明確であるが、1基の木棺墓を含め列墓的な様相を看守することができる。また、これまで触れてきた戦後の校内における甕棺墓の調査報告¹⁾で略図ながら示されている配置位置図においても南北方向の墓地構成であることが理解できる。なお、その略図から現在地の比定を試みたが、縮尺が示されていないことや図示された建物と現在の学校施設とは大きく異なることから正確な比定は困難であった。しかし、略図に図示されている現存の学校東側の道路や南側および西側の崖面の位置関係から、今回の調査区は略図の南西側に集中して分布する1～3号、8・9号に近接する可能性が高い。なお、このうち金海式の2号甕棺墓から細形銅戈1口が出土している。ただし、今回の調査区内では既往の調査時の痕跡は確認できていない。

統いて埋葬遺構の時期についてであるが、甕棺墓は橋口達也氏の編年²⁾に依拠すると、ST001・004・007はK I c式で、007は口縁部の内側への突出が顕著である。ST002は口縁部を欠くが、胴部沈線からK I c～K II a式であることが推測でき、退化した沈線は後出的な様相を呈する。ST003・006は胴部の一部しか遺存しておらず、詳細な時期は不詳である。ST006のみ胴部に三角突帯を貼付する上甕(7)を用いており、最も後出する甕棺墓に位置付けられる。口縁部の上面はほぼ平坦であり、K II a～K II b式であろう。また、SR008は出土遺物から時期の比定は困難であるが、甕棺墓群の列中に主軸をほぼ同じに重複なく配列されており、甕棺墓と同時期の所産と考えられる。よって、埋葬遺構は、前期末から中期前半に造営されており、前者の集落から墓地へと性格を変えて変遷したことが窺える。

有田遺跡群に点在する弥生時代終末期を除く甕棺墓地は、現在までに6地点が確認されている。その時期は前期後半から後期初頭におよび、甕棺墓制の初現から盛行、衰退期までをほぼ含んでいる。また、墓地の多くは、本調査区同様の支丘端部に立地し、時期の限定された数基から構成される墓地が多い中で、北西端の支丘上の第64次調査区周辺に占地する前期後半から後期初頭の長期間に亘る墓地は40基以上からなる。今回の調査では、戦後調査の細形銅戈を副葬する甕棺墓1基を含む9基を加え、16基以上で構成される遺跡内では規模の大きな甕棺墓地が存在していたことが判明した。ただし、この墓地は中期中頃以降には継続せず、北西端の墓地のあり方とは異なる。また、北西端部の墓地では、第177次調査においてK IIIc式甕棺より前漢鏡1面、同調査KIVa式甕棺より小銅鏡1面が出土しており、遺跡内における墓地の継続経営と権力構造を比較検討する上で興味深い。

註)

1) 森貞次郎「有田甕棺跡と銅戈」『有田遺跡』福岡市教育委員会 1968年

2) 橋口達也「甕棺の編年的研究」『九州総貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』31中巻 福岡県教育委員会1979年

図 版



作業風景



調査区全景(東から)

図版 2



(1) ST001 (東から)



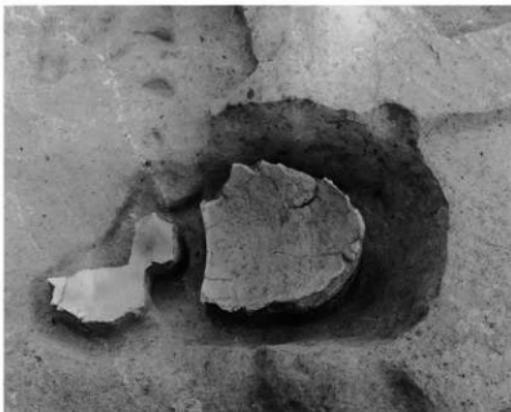
(2) ST002 (西から)



(3) ST003 (東から)



(1) ST004 (西から)



(2) ST005 (東から)



(3) ST006 (南から)

図版 4



(1) ST007 (東から)



(2) SR008 (西から)



(3) SR008 土層 (南から)



(1) SU011 (南から)



(2) SU012 (北から)



(3) SU012 土層 (東から)

図版 6



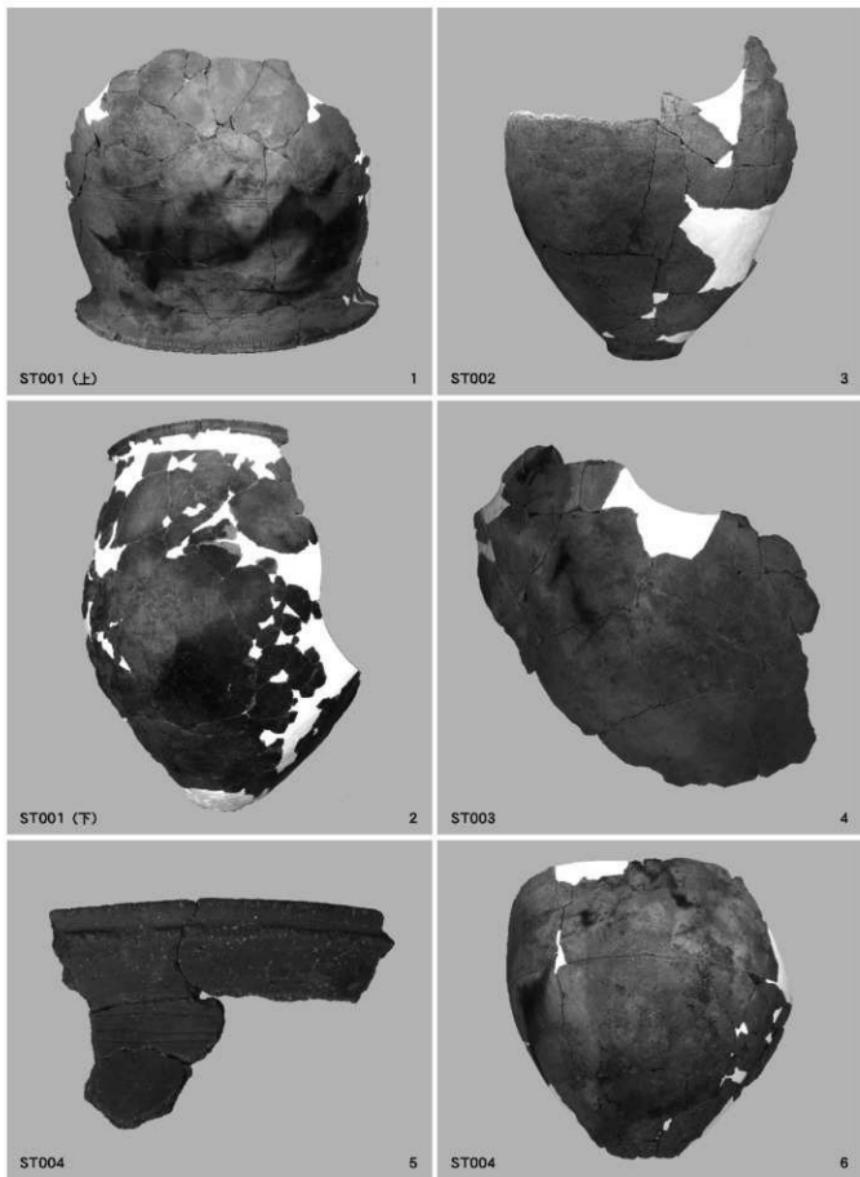
(1) SU013 (東から)



(2) SU013 土層 (東から)

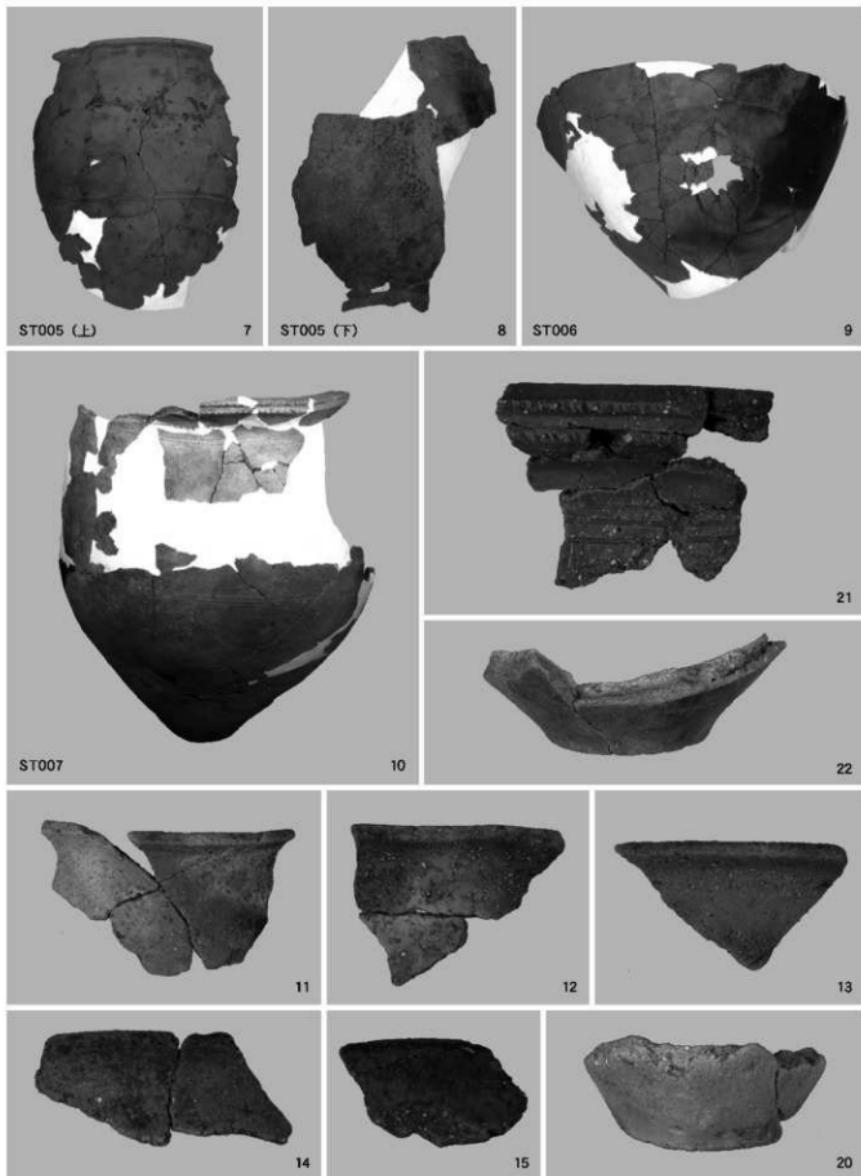


(3) SK014 (北西から)



出土遺物 (1)

図版 8



出土遺物 (2)

報告書抄録

あり た こ た べ
有田・小田部 54

－有田遺跡群第 246 次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1215集

2014(平成26)年3月24日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092)711-4667

印刷 巧文社印刷株式会社
福岡市博多区古門戸町9-16
(092)271-2124
